公益財団法人大林財団

研究助成実施報告書

助成実施年度	2020 年度
研究課題（タイトル）	戦後日本の雑誌メディアにおける都市論の展開に関する史的研究
研究者名※	宮下 貴裕
所属組織※	武蔵野大学 工学部建築デザイン学科 助教
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	84.8 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（　）は、報告書提出時所属先。

（研究報告-様式 2）

大林財団２０２０年度研究助成実施報告書

所属機関名　　武蔵野大学
申請者氏名　　宮下　貴裕

研究課題	戦後日本の雑誌メディアにおける都市論の展開に関する史的研究

（概要）※最大 10 行まで

本研究は、学会誌、専門雑誌、総合雑誌という専門性の度合いやオーディエンスとする対象が異なる各メディアに注目して、そこで形成された言論文化と、都市・建築という空間領域を問わず「都市における空間デザイン」に関して構築された「思想」の連続的コンテクストを明らかにし、今後の空間デザインのあり方を模索するための知見を見出すことを目的としたものである。そして雑誌というプラットフォームに蓄積された空間デザインの「思想史」とこれまで注目されてきた「技術史」の接続を目指した。わが国における議論のコンテクストを把握する過程で、「みち」という空間と概念が常に議論の俎上に載せられてきたことが明らかになった。そこで収集した言説の中から特に「みち空間」に関する言説を抽出し、それぞれの時代における問題意識や「みち空間」に見出された価値に関する知見を把握した。

１．研究の目的　　（注）必要なページ数をご使用ください。

近年都市計画・都市デザインの分野においては、空間のデザインに対する認識の多様化が進んでおり、自治体による公共政策としての空間整備や、建築家による公共・商業施設をはじめとする「都市的建築」の設計などの新規開発に留まらず、地域組織や民間事業者による空間マネジメントなど、都市環境ストックの活用に価値を見出す動きも見られている。さらにポストコロナの時代においては、既存都市環境の再評価とあるべき生活様式の再定義に関する議論がより活発化すると考えられる。これは空間設計手法の考案、法体系の整備、事業の創設といった空間デザインの「技術」に加え、既存の都市環境をどのように認識・評価し、そこからどのような生活像・空間像を模索すべきかという都市の「思想」が重視されるようになることを意味している。しかしこの「技術」と「思想」の接続という観点は、これまでのわが国の都市づくりの展開を把握する試みの中では十分に意識されてこなかったと言える。都市計画史研究では法整備や事業展開といった「都市計画技術」の系譜がテーマとなることが多く、建築史研究においては都市に関与してきた建築家について、多様な「思想」が提示されたものの、社会の状況や都市計画行政との関わりの中で上記のような「技術」構築に大きな影響を与えられなかったと評価されることが多い。しかし雑誌メディアという媒体に注目すると、空間デザイン手法の構築や都市像の提示、空間イメージの共有などに関して、どの時代においても都市計画の「技術」構築に取り組んだテクノクラート、「思想」構築に取り組んだ都市計画・建築学研究者、建築家といった各専門家の間で活

発な議論が展開されていた。本研究では雑誌メディアを、わが国の戦後において空間デザインに携わる各主体が都市に関する多様な議論を蓄積させてきたプラットフォームとして位置づける。そこで展開された「技術」の結実としての都市空間の紹介とそれに対する批評、「思想」を実際の空間デザインに還元しようとする提案、官民学連携による共同研究の発表などの言説の分析を通して、「技術」と「思想」の双方に関する言説を内包させた大きな枠組みによる都市論の文脈を表出させ、それが社会に対してどのように発信されてきたのかを明らかにし、現代における議論への新たな知見を見出す。雑誌という媒体は単行本と比較して即時性が高く、新聞紙面と比較して議論の構造をより深く把握できるものであり、各論者の問題意識や主張を実際の社会の動向との関係性の中で理解することができるメディアであるため、本研究の目的に最も適合する調査史料となると考えた。

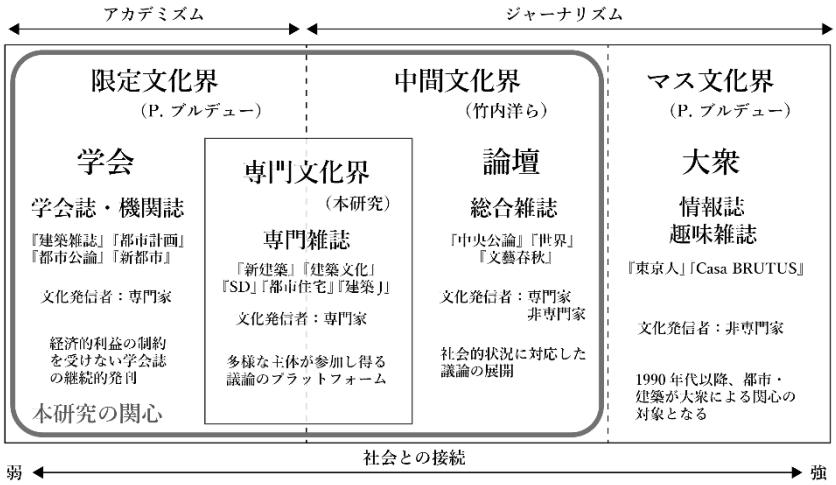
２．研究の経過　（注）必要なページ数をご使用ください。

2021 年 4 月より、戦後期に刊行された各種雑誌の言説収集を実施した。本研究が設定した「限定文化界」「専門文化界」「中間文化界」の各文化界のメディアには都市の空間デザインに関する膨大な議論が蓄積されていたが、その中から「みち」という空間と概念が常に議論の俎上に載せられてきたことが明らかになった。資料収集は国立国会図書館で実施し、『建築雑誌』『都市計画』『新建築』『建築文化』『SD』『都市住宅』『中央公論』の記事精読を行った。

2021 年 8 月より、収集した言説の中から特に「みち空間」に関する言説を抽出し、それぞれの時代における問題意識や「みち空間」に見出された価値に関する知見を把握した。

３．研究の成果　（注）必要なページ数をご使用ください。

① アカデミズムとジャーナリズムを横断する議論プラットフォームの抽出



本研究では、専門性の程度や文化発信者（書き手）・文化消費者（読み手）の属性などによってＰ．ブルデューが設定した「限定文化界」と「マス文化界」という領域、竹内洋らが設定した専門家と非専門家が文化発信者にも文化消費者にもなる総合雑誌を中心とした「中間文化界」という領域に加え、社会一般をオーディエンスとするジャーナリズムという性格を持ちながらも、より専門性の高い議論が展開された「専門文化界」という領域を設定した。研究内で対象とした各雑誌は、編集体制や編集方針、記事の内容などから、『建築雑誌』『都市計画』を「限定文化界」、『新建築』『建築文

化』『SD』『都市住宅』を「専門文化界」、『中央公論』を中間文化界に位置づけた。

「限定文化界」の雑誌は学会誌であることから編集者＝専門家である一方で、「中間文化界」の雑誌の編集者は発行元の出版社社員であるという大きな相違があった。またその中間に位置する「専門文化界」の雑誌では、編集者は「中間文化界」と同じく出版社社員であったが、特集ごとに専門家の監修者を招いたり、専門家やその研究チームの研究成果を掲載したりすることが多かったため、専門家が毎号の出版物の方向性に大きく寄与していた。

② 各文化界における議論の展開とその特徴

各雑誌における詳細な言説分析を行う上では、先述の通り特に「みち空間」に関する言説を抽出することとし、それぞれの時代における問題意識や「みち空間」に見出された価値に関する知見を把握した。「みち」に関する議論は単に道路空間そのものを扱ったものに留まらず、建築空間において「みち」というイメージを見出し議論を展開するものや、道路空間とその両側の建築を含む空間領域に注目して議論を展開するものが存在したことから、本研究では「道路空間への注目」「建築空間への注目」「道路と建築の関係性への注目」という 3 つの観点から分析を行い、それぞれのカテゴリーのコンテクストの中で生み出された議論の系や高い関心が示されたテーマを抽出した。3 つのカテゴリーの中で各論者の問題意識や論の展開から共通するテーマとして抽出された議論の系は以下の通りである。

① 道路空間に注目した議論の展開
- a. 都市のインフラストラクチャーとしての「みち空間」
- b. 生活の場としての「街路」の価値
- c. 歩行者空間化の実践
- d. 「街路」の存在意義の再考　各雑誌で企画された街路特集

② 建築空間に注目した議論の展開
- a. 屋内空間の設計における都市との連続性の確保
- b. 欧米都市における再開発事例の紹介と分析
- c. 建築の群設計におけるネットワークとしての「みち空間」
- d. 屋内空間の骨格としての「みち空間」
- e. 屋外空間の設計における公共性の創出

③ 道路と建築の関係性に注目した議論の展開
- a. 道路と壁面による空間構成への注目
- b. 人間の知覚に注目した欧米における理論の紹介
- c. 歴史的都市環境の再評価
- d. 「日本的広場」発見の試み
- e. 日本の都市の観察と記録
- f. コミュニティの空間への表出に対する関心

15 の系においては、議論の対象とした空間領域が異なる中でも「みち」という概念に関して共通するイメージが描かれたり、ある系において見出された視点が他の系へと引き継がれたりと、

それぞれの系の間に多くの影響関係が見られた。またこれらの議論の系は文化界の異なる雑誌においても同様の傾向が見られ、各文化界の間にはそれぞれの時代における問題意識や知見に共通点や相互影響関係が存在することが明らかになった。「みち空間」に関する議論が議論の対象とした空間領域は大きく道路空間と建築空間に分けられるが、それぞれの領域を対象とした議論の展開に注目すると、1970 年代始めまでの道路空間に関する議論において見出された「みち」のイメージが、同時代あるいはその後の建築空間に関する議論に対して大きな影響を与えていることが考えられる。また「みち空間」の価値や特徴を「広場」との比較を通して主張する議論が道路空間と建築空間それぞれの領域を対象とした議論の系において登場し、1962 年の黒川紀章の主張を契機として、「日本では歴史的に道が広場の役割を果たしてきた」という見解が一般的な共通理解として浸透するようになったことが理解できる。

一方でそれぞれの議論においては、得られた知見が実際の空間デザインの発想に結びついたケースとあくまで調査・研究レベルに留まったケースという二つの方向性が見られた。このことには、各議論において「みち空間」を把握する視点が現象論的アプローチによるものか手法論的アプローチによるものかの違いが大きく関係していると考えられる。手法論的アプローチによる議論は「歩行者空間」をはじめとして海外における具体的な空間デザイン手法が数多く紹介され、1970 年代からわが国の法体系における実践を想定した議論が展開されるようになった。専門雑誌にはテクノクラートの側から発信される研究や主張も掲載され、横浜市をはじめとする先進的な自治体で実際の空間デザインに反映されていることが理解できる。これに対して、わが国の「みち空間」がもつ独自の特性や価値に関する知見は、その多くが主に道路空間を対象とした現象論的アプローチによる議論からもたらされ、わが国における既存の都市空間の分析や欧米の都市との比較研究などを通してその固有性を見出す取り組みとして多くの蓄積が見られた。しかし具体的な空間デザイン手法とは結びつかなかったためにテクノクラートの政策に対する影響力は弱かったと考えられる。一方でわが国の「みち空間」がもつ固有性を実際の空間デザインに反映させようとする試みは建築空間を対象とした議論において見られ、現象論的アプローチを通して見出された知見の影響を受けたこれらの「議論の系」において「みち空間」のイメージが「手法」として還元されていることが明らかになった。

「限定文化界」から「マス文化界」までを形成した各誌はそれぞれ異なった運営形態をもち、執筆者の属性や社会との接続意識の高さなど異なる特徴が見られた。商業面の懸念が存在しない学会誌は、それゆえに社会的関心を直接反映させるという姿勢が弱かった可能性もあるが、これらには学会員である専門家が編集委員として参画し、都市・建築に関する学問領域で共有されていた問題意識や議論の方向性が示された。専門雑誌においては出版社の編集部が特集を企画していたことから、専門家によって展開される議論の方向性に対して編集部の意図が大きく反映されていた可能性も考えられるが、学会誌と比較してはるかに多くの読者を対象としたメディアで、テクノクラートから民間の専門家までの多様な主体が登場し、建築作品の紹介・批評から大学の研究室や建築設計事務所などによる研究発表まで多様なコンテンツが掲載された。そして発行部数が最も多い総合雑誌は、専門家ではない一般大衆が読者として想定されていたことから、専門家が登場する場合でも抽象的な議論に留まってしまうケースも存在したと考えられるが、他分野の専門家との対談や座談会など、専門領域を横断した新たな議論の方向性が生み出されることが多く、社会の動向とのつながりの強さから、ここで展開された議論は一般社会で共有されていた

問題意識が反映されたものであると理解できる。

４．今後の課題　　（注）必要なページ数をご使用ください。

本研究では、各文化界の雑誌における都市空間デザインに関する議論展開の把握を目的とし、その中で「みち空間」に関する言説への注目から様々な議論の系の形成と変遷を明らかにしたが、様々な人物による様々な空間を対象とした言説を収集する中では、「思想史」というアプローチを有しながらも、「みち」に関する言説以外の議論テーマは議論の対象外とせざるを得なかった。またそれぞれの専門家の背景にある政治的姿勢などは深く掘り下げることができなかった。例えば、学生運動が活発化した 1960 年代には若い著者による「みち」に関する言説も多く見られたが、当時流行していた左翼思想と「みち」や「ストリート」の関連性など、分析対象とした言説の中には直接的には記されていない政治的思想などについては不明な点が多い。よって本研究は、空間論や機能論、文化論といった側面から戦後におけるわが国の都市の状況やそこから生み出された多様な主体による知見を把握するという性格を有している一方で、政治的背景も含めた日本人の都市に対する問題意識を時代を反映する思想として網羅することができなかったことは、反省点として残されている。

また当初本研究が目指した、各文化界における議論展開の差異と各文化界の相互影響関係の詳細な解明は時間の制約上困難となってしまった。